

様式4

令和5年度 学校運営協議会評価報告書1

鳥取県立倉吉東高等学校
 学校長 福光 浩

| 評 価 日 | 令和5年6月26日(月) | |
|--|--|--|
| 評 価・提 言 | 学校の所見・改善策 | |
| <p>1 目標設定について</p> <p>2 評価項目と目標達成のための取組について</p> <p>(1) 学校の魅力化・特色化の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ I B教育は確かに魅力的な取組だが、I B選択者以外にその魅力を波及させていくことが重要と考える。それについての具体的な方策があれば教えてほしい。 ・ I B教育に力を入れることで、I B生以外の生徒への支援が低下しないか。低学力層への指導がおろそかになれば、「面倒見が良くない学校」というマイナスの評判が増えてしまうことになりはしないか。 ・ I B教育は英語で行われると聞いているが、生徒はどの程度の英語力が必要となるのか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校目標を10年超で達成を目指す長期目標、5年程度の中期目標、当該年度の短期目標とし、長期目標には「I Bの学習者像」の要素を取り入れた。 ・ 短期的には、定員割れを解消するため、中高連携の推進と学校の魅力化・特色化の推進が急務である。 ・ 今年の1年生全員がコア科目のCASを通じて社会との繋がりを学び、TOKを通じて批判的思考を鍛えている。今後全ての教科の授業でI Bの手法を取入れ、学びの質を向上させていきたいと考えている。 ・ I B生の指導は来年から本格的に取り組むことになるが、ご指摘のとおりI B生のみ注力しても魅力的な学校とまらない。全ての生徒に適切な支援を行っていきたい。 ・ 全ての教科はなく「英語」と「数学」のみ英語で授業を行う。数学に関してはネイティブの数学教員と日本人の数学教員のチームティーチングで行う。英検準2級程度の能力があれば理解可能と想定している。 | |

・ I B系の定員は現在最大 20 名だが、今後もこの定員を継続していくのか。 I B 人気が高まった場合、定員を増やす予定はないのか。

(2) 学校の諸活動の活性化と発信

・ 部活動の改廃について、この春に「廃部」に関する連絡があったが、「廃部」は東高のイメージダウンにつながりかねない。外部指導者を活用するなどしてマンパワーを増員し、なんとか現在の体制を継続することはできないか。

3 具体目標について

・ 探究学習を進めていくために、具体的にどのような取組を行なっているのか。

4 目標達成のための具体方策について

・ 探究学習に取り組む上で、単に自分たちで調べるだけでなく、高大接続をもっと活用していくとよいのではないか。

・ 昨年倉吉農高と東高生が共同研究した「青パパイヤの研究」は面白かった。高大接続だけでなく、校種を超えての共同探究を続けていってもらいたい

5 その他

・ 「教職員の働き方改革」と「生徒への指導の充実」とをどのように両立させていくのか。

・ 県が教職員の数を増やしたり、施設を拡大してくれれば定員増の可能性はある。しかし、先進校の定員も 20 名程度であること、 I B 教育を効果的に進める上で少人数指導が重要であることから、今のところ無理な定員増は考えていない。

・ 継続の要望はあるが、現在の学校規模で部活動数を維持するには限界がある。生徒・職員数と部活動の数を適切なものにする事で指導の充実を図りたい。部がない競技でも高体連の大会に参加したいという希望があれば、引率を付けて対応するなどできる限り支援は継続していく。

・ 1 年次で探究の手法について学び、 2 年次に自分のテーマを設定して探究活動を行い、成果をまとめて発表している。

・ 現在も島根大学の研究室訪問や鳥取大学等の施設・設備の利用をお願いしているが、これらを継続・発展させていきたいと考えている。総合型選抜入試の定員が増加しており、面接や小論文に取り組む上で、充実した探究活動は効果的なツールとなる。キャリア形成の一環として探究活動に取り組みせたい。

・ 業務の精選と効率化を進めていくことで、生徒に対しての指導時間を生み出し、教育の質を担保していきたいと考えている。